【東京お寺めぐり通信】2016年11月15日発行
制作　有限会社ケーアンドケー
〒170－0013　東京都豊島区東池袋1－28－1－810
TEL.03-3981-6985　FAX.03-3981-6984 http://kaeru-kan.com
Copyright©2015　Kerori & Vikki Takayama All rights reserved

東京55仏教会便り

東京お寺めぐり通信

no.02
2016 Autumn

一蛙さんとめぐる東京・第2回

本所で見つけた一蛙さんの文化的背景

本サイトで明治・大正・昭和の東京の案内役を務めてくださることになった小澤一蛙さん（明治9年―昭和35年）。その一蛙さんも参加していた趣味家集団「我楽他宗」の創設者は三田平凡寺という方で、小澤さんとは生年も没年も同じ人でした。

現在、その名前を知る人は少ないかもしれませんが、明治の文豪夏目漱石とは、お互いの子ども同士の結婚により、姻戚関係になっています（※夏目漱石のお孫さんに漫画評論家で現在学習院大学教授の夏目房之介氏がいますが、三田平凡寺氏はその母方の祖父に当たります。）

今も遺っている写真の一枚を見ると、ステテコ姿に山高帽をかぶり、ローラースケートを履いています。これが明治生まれの方のスタイルかと思うと、「ハイカラ趣味」の振れ幅の大きさを感じます。

平凡寺氏の本名は林蔵といい、実家は材木商でした。幼い頃のワルふざけのような行為からか聴覚を失ったため、正規の学校教育は受けなかったようですが、最後の浮世絵師、「明治の広重」と評された小林清親に絵を習い、情歌（都々逸）や狂歌、狂詩など江戸時代に隆盛を極めた趣味的教養を身に着け、さらには旺盛な読書を通じて蓄えた知識をもとにかなりユニークな文化史観を築いていたと考えられます。

また、平凡寺氏が神と崇拝する存在に淡島寒月（1859-1926）がいます。井原西鶴再評価のきっかけをつくり、江戸にまつわる話や自分の体験に基づく小説などを新聞・雑誌に寄稿していました。寒月という名前は、夏目漱石の『吾輩は猫である』に登場する学者「水島寒月」に採られているといわれています。

今回、本サイトでは本所仏教会のお寺を巡りました。そのひとつ、向島の墨堤沿いにある黄檗宗 寺院弘福寺に辿り着いたとき、山門前に設置された解説で同寺境内には、寒月が父親の淡島椿岳の使っていた隠居所を「梵雲庵」と名付けて自らも暮らした住まいがあったことを知りました。

収集家でもあった寒月の、この梵雲庵には、三千点余りの玩具や江戸関連の貴重な資料がありましたが、関東大震災ですべて焼失してしまいました。

当時、日本橋に住んでいた小澤一蛙さんも、この震災でやはり三千点ほどのカエルの収集品を失っています。関東大震災は形ある江戸の文化の多くも焼き尽くしたのでした。

（カエル文化研究家　高山ビッキ）

● 明治・大正・昭和の東京人　小澤一蛙 Gallery ●

小澤一蛙制作の絵馬

第2回　本所仏教会

震災戦災を忘れないために足を運ぶ場所としての本所

本所仏教会の慰霊行事
2016年の巡回法要
耐震補強工事の完成と花が毎年咲く理由

芥川龍之介とともに本所の明治・大正を歩く

作家の子どもの頃の本所界隈
芥川龍之介が見た震災後の本所
関東大震災で失われたものとは

21世紀の本所で江戸の風情を味わうために

水上バスで江戸の隅田川を行く
浮世絵の中で江戸の隅田川を遊ぶ
隅田川が生んだ歌舞伎作者河竹黙阿弥

中国料理 東天紅
過去から未来へつなぐ、木のご縁 株式会社 下野材木店 卒塔婆・護摩札・絵馬・御守
株式会社竹澤建築設計事務所
100年カエル館

東京 お寺めぐり

第2回 本所仏教会

東京の歴史をさかのぼりながら仏教寺院のある
寺町を歩く本サイトの第2回は、本所仏教会を紹介します。
東京都墨田区には、隅田川東岸一帯の東京スカイツリーより北に向島仏教会、
南に本所仏教会があります。
2012年に634メートルの東京スカイツリーが開業してからは、
どこにいてもこの高い塔に見守られているように感じられる墨田区界隈。
その本所地域を訪ねてみましょう。

震災・戦災を忘れないために 足を運ぶ場所としての本所

3月10日の法要と一般焼香の様子。この日は午前中に公益財団法人東京都慰霊協会による法要、午後に本所仏教会による法要が行われました。

2016年3月9日と10日に東京慰霊堂で関東大震災と東京大空襲による犠牲者を供養する春の東京慰霊法要が行われました。

本所仏教会の慰霊行事

昨年の2015年は戦後　70年の節目で、原爆が投下された広島、長崎での慰霊行事はもちろん、1945年3月10日の東京大空襲で最も被害が大きかった本所地域では、昨年5月26日、天皇皇后両陛下が終戦70年の慰霊の旅の一環として20年ぶりに東京都慰霊堂を行幸啓されました。

42ヶ寺から成る本所仏教会では、横網町公園にあるこの慰霊堂を起点に、毎年春と秋に関東大震災と東京大空襲による犠牲者を供養する東京慰霊大法要への奉仕活動や本所地区内の震災・戦災慰霊碑の巡回法要を行っています。

2016年3月9日に行われた春の巡回法要に本サイト取材班も同

慰霊堂内の壁には関東大震災当時の状況が描かれた絵が掛けられています。

行しました。

戦後も70年以上が経ち、戦争の悲惨さや平和への強い願いを体験として伝える人が少なくなったといわれます。その終戦からさらに20年ほど前の大正12年（1923）に起こった関東大震災に至っては、人々の記憶をたどることは最早難しいことでしょう。

ここ横網町公園は、関東大震災当時、陸軍被服廠の跡地で、同公園の造成中でした。地震により火事が発生し、火が迫るのを感じた本所周辺の人々はここに避難しましたが、火の手はまだ遠いと見たにもかかわらず、家財道具などを運び込んだときには、想像以上に速く広がった猛火で四万四千人もの人々が命を落としました。

慰霊堂は昭和5年に、建築家伊東忠太の設計で建立されました。現在、昭和20年の東京大空襲の戦災犠牲者とともに十六万三千人の遺骨が納められています。

2016年春の巡回法要

巡回法要はここから出発し、北回り（本所警察署―吾妻橋―法恩寺境内―妙見山別院境内）と南回りの二手に分かれて巡ります。取材班は南回りに同行しました。

南回りは、まず本所警察署から両国二丁目の回向院へ。歴史をさらにさかのぼっても江戸は火事や水害に見舞われることの多かった土地。明暦3年（1657）には、江戸市街の6割以上を焼き尽くし、10万人以上の命を奪った明暦の大火「振袖火事」がありました。回向院は、その時無縁となった多くの亡骸を葬るために、当時の将軍家綱の命により開かれた浄土宗寺院です。同寺院はその360年の長い歴史の間に、度重なる火災、20世紀の震災・戦災と、幾度もの存亡の危機を乗り越え現在に至っています。

法要は次に江戸十二薬師のひとつ「川上薬師」のある弥勒寺へ。三千五百体の遺骨が納められている観音立像に向かって本所仏教会の僧侶たちが読経しました。

そこから次は竪川地蔵尊のある榎稲荷神社へ。大空襲は昭和20年の3月10日未明にあり、この近くの菊川小学校に逃げ込んだ人々が多数焼死しました。当時、隣接していた菊川公園に埋葬された人の数は四千五百十五人。その後しばらく町は無人化するも、徐々に復帰する人が増えるなかで、犠牲者の冥福と恒久平和を念じて建立されたのがこの竪川地蔵尊です。境内には焼夷弾の炎で焼けて炭化した榎が遺されています。

そこからほどないところに架かる菊川橋。そのたもとの児童遊園内に夢違え之地蔵尊があります。その年の3月10日にはこの菊川橋でも大勢の人が亡くなりました。橋へは焼夷弾降るなか逃げ惑う人が押し寄せ、三千人もの人が亡くなりました。それはまさに悪夢としかいえない現実で、その悪夢が二度と繰り返されず、善夢に導かれるようにと昭和58年（1983）3月10日に建立されたのがこの夢違え地蔵尊です。僧侶による読経の後、ご遺族が手を合わ

江戸十二薬師のひとつ弥勒寺の戦災殉難慰霊観音像の前で読経する本所仏教会の僧侶たち。

戦後、地元の有志によって建てられた竪川地蔵尊。最初菊川公園内に建立されましたが、公園改修のため榎稲荷神社敷地内に移転。

榎稲荷の境内には焼夷弾で焼けて炭化した榎があり、木製の供養之塔には「竪川地蔵尊戦災震災殉難者諸霊位供養之塔」と書かれています。

大横川が新大橋通りと交差するところにある菊川橋。夢違之地蔵尊はその北西側のたもとの菊川児童遊園内にあります。

2016年3月9日は悪天候のなか東京都慰霊協会スタッフの皆さんによってお焚き上げが行われました。

錦糸町の観音様として親しまれている江東観世音。境内に戦災慰霊碑が祀られています。

慰霊堂の前でお焚き上げに向かって読経する本所仏教会の僧侶の皆さん。中央が佐藤大英会長。

せました。

南回りの巡回は、戦災慰霊碑のある江東寺を最後に、再び慰霊堂に戻りました。

耐震補強工事の完成と花が毎年咲く理由

慰霊堂は、一昨年に着手した耐震補強工事が今年2016年2月に完成したばかりでした。その工事の経過を写真で紹介する展示と、創建された昭和5年当時に製作された部材の一部の保存展示が公開されるなか、堂内で慰霊法要が行われました。ここで二日続けて本所仏教会は宗派の異なる寺院の僧侶たちがひとつになって読経します。同仏教会会長の圓通寺佐藤大英住職にお話を伺うと、同地区42ヶ寺、すべての仏教寺院もまた震災・戦災の遺族であることに改めて気づかされました。

今年の3月9日は小雨の降る風の強い一日でした。慰霊堂での法要の最後に堂前でボーイスカウトの方々の警備のもとに実施されるお焚き上げも風にあおられていました。

その肌寒さのなかにあって、正門のそばに咲いていたのはカンザクラ。その時、なぜ毎年春が来ると花が咲くのかわかったように思いました。

芥川龍之介とともに本所の明治・大正を歩く

東京両国國豊山回向院境内之図（回向院所蔵）

作家の子どもの頃の本所界隈

本所地域が大正の震災、昭和の戦災で失ったものは筆舌に尽くしがたいものです。

しかし、その震災と戦災を史実でのみ知る者にとって、この悲劇が起こる前のこの界隈の様子を想像することは決して意味のないことではないかもしれません。

本サイトでは、その案内役を明治・大正の文学者、芥川龍之介（1892—1927）にお願いすることにしました。『芥川竜之介随筆集』（岩波文庫）をもとに見ていくことにします。

芥川は京橋区入船町の生まれですが、生後間もなく本所区小泉町に移り、現在も両国駅からすぐ近くにある浄土宗寺院回向院の斜め向かいで育っています。随筆「追憶」に「幼稚園は名高い回向院の隣の江東小学校の付属である」と書いています。

芥川の子どもの頃、回向院の境内ではさまざまな見世物が催されていました。「風船乗り、大蛇、鬼の首、何とか云う西洋人が非常に高い棹の上からとんぼを切って落ちて見せるもの、—」「しかし一番面白かったのは（1894年に来日した西洋の操り人形一座）ダアク一座の操り人形である。」また、1909年に江東小学校のあった場所に国技館ができるまで、江戸相撲の本場所は回向院境内に筵張りの小屋をかけて興行していたので、芥川も早くから相撲に親しみ、贔屓の力士もありました。

両国橋近くにあった料亭「二州楼」では、5～6歳の頃に父親と初めて活動写真を見ています。この二州楼では桟敷に座って川開きを見たことも。「大川（＝隅田川）は勿論鬼灯提灯（ほうずきちょうちん）を吊った無数の船に埋まっていた。」この時、

勧進帳大相撲取組ノ図／歌川国輝（回向院所蔵）

現両国小学校の前に創立115周年記念事業として建てられた、同校が輩出した文豪芥川龍之介を偲ぶ文学碑。代表作のひとつ「杜子春」の一節が引用されています。

木橋だった両国橋の欄干が壊れ、多数の溺死者を出す事故が起こる。幼い芥川の記憶には、この時聞いた大勢の人々の雪崩れる音も耳に残りました。

明治の頃、両国橋から厩橋（うまやばし）にかけての墨田川岸は夏期に水泳場になりました。芥川少年もここで水泳を習っています。こうして、本所地域で二十歳頃まで暮らし、作家としての感受性を養ったと云えるでしょう。

芥川龍之介が見た震災後の本所

大正12年の震災から5年後の1927年、芥川35歳。東京日日新聞の連載企画で、本所両国の震災以後の変貌を随筆にするためこの地に足を運びます。

そのとき、両国橋を渡りながら見たものは「大川の向こうに立ち並んだ無数のバラック」。「実際烈しい流転の相に驚かない訳には行かなかった」と記しています。

現在、慰霊堂のある横網町公園は、この震災当時陸軍被服廠跡地だったと先に書きましたが、さらにその昔、芥川の子どもの頃までは「お竹倉」と呼ばれる、江戸幕府の資材保管所でした。総武鉄道の工事が始まるまでは雑木林や竹やぶがおい茂る野原で、芥川少年の遊び場でもありました。

「僕に自然の美しさを教えたものは何よりも先に『お竹倉』だったであろう」と回想しています。

明治以前の本所界隈は、墨田川西岸の大商店が立ち並ぶ日本橋や京橋と違って、人で賑わう場所ではありませんでした。芥川によれば賑やかな通りといえば「両国から亀沢町に至る元町通り」「二の橋から亀沢町に至る二つ目通り」その他、「石原通り」や「法恩寺橋通り」ぐらいだろう、と。

江戸時代の本所は、「伊達様」「津軽様」といった大名屋敷のある封建的な雰囲気の町で、近くに広がる「お竹倉」は昼間でさえ暗く寂しい場所。明治に入っても家の灯りといえばランプのみなので、町はどこも薄暗いなか、まことしやかに語られたのが、「おいてけ堀」「馬鹿囃」「送り提灯」「落葉なき椎」「津軽家の太鼓」「片葉の芦」「消えずの提灯」といった本所七不思議です。

いずれも奇談、怪談に相当するもので、落語の演目になっているものもありますが、ありえない声や音が聞こえたり、光を見たり、植物に魂が宿っているかのように思える、昔のこの辺りの饒舌なほどの寂しさが伝わります。

実際、芥川も「元町通りを歩きながら、お竹倉の向こうに莫迦囃を聞いたのを覚えている」と書いています。父親が遭遇した「若侍に化けた狐」の話や、母親が話していた「大川に出没する河童」のことも、事実とは思っていないとしながらも、明治時代までの人々は墨田川とともに野趣あふれる本所界隈に、「詩的恐怖」をもっていたのだろうと回顧しています。

関東大震災で失われたものとは

ところで、本サイト取材班は、巡回法要で本所仏教会の僧侶の方々のクルマを追い掛けて本所警察署に向かったところ、そこには警察署はなく、通りかかった人に聞いたところ3年前に移転したとのこと。最新の地図を確認しなかっただけなのですが、もしや永遠に近づけない「送り提灯」的な現象かとも……。しかし、次の巡回先の回向院で仏教会の皆さんが待っていてくださいました。いやそれとも、子どもの頃、本所警察署は古い赤煉瓦の建物だったと懐かしむ、芥川龍之介に道案内されたのでしょうか。

思えば、芥川は私たちが同行した巡回法要のうち、竪川付近では小説『妖婆』（大正8年『中央公論』より）を発表し、そのなかに回向院の表門に近い横町にあった軍鶏（しゃも）料理の老舗「坊主軍鶏」を登場させています。また、大正10年に『大阪毎日新聞』の夕刊に連載した『奇怪な再会』では、「本所の横網」そして「弥勒寺周辺」（昭和26年に掘割が埋め立てられ今はない弥勒寺橋に立った縁日）が舞台になります。

その文学がいかにこの本所、そして隅田川を母体として育まれていったかがわかります。

芥川は随筆「本所両国」に、震災後の思いをこう書いています。「江戸時代に興った『風流』は江戸時代と一しょに滅んでしまった。唯僕等の明治時代はまだどこかに二百年間の『風流』の匂いを残している。けれども今は目のあたりに―」

言葉を失うしかなかったのかもしれません。

21世紀の本所で江戸の風情を味わうために

水上バスで江戸の隅田川を行く

平成24年に本所仏教会が発行した「墨田区お寺めぐり地図」に、東京スカイツリーと仏塔のひとつである卒塔婆は、大きさは桁外れに違ってもどちらも同じく「塔」であると説明されています。「とがった尖塔は神様や仏様の宿るところ」とも。改めてスカイツリーは本所のいたるところで人々の暮らしを見守っていると感じます。

さて、芥川龍之介も「滅んでしまった」と嘆いた「江戸時代の風流」をさらに時を経た今、私たちは本所のどこで味わえばいいでしょうか。

そのひとつの手段として、両国駅を出てすぐのところに発着所がある水上バスに乗ることをおすすめします。

水上バスという「船」に乗って、両国橋を背後に見て出発し、蔵前橋、厩橋、駒形橋、吾妻橋、言問橋、桜橋とくぐり抜けながら隅田川東岸を見れば、たとえ東京スカイツリーや金色の雲を載せたようなユニークなデザインのビール会社本社ビルが目に入ったとしても、墨田川に浮かぶ船の上から本所を見るという、江戸時代の人々が楽しんだ同じ行為に、何やら時を忘れてしまうような昂揚感が味わえます。

本所地域には、如意輪寺、法恩寺、法性寺、福厳寺など江戸時代以前に建立された寺院も多いので、早くから人が住みついていたと考えられます。しかし、本格的に再開発が始まったのは、回向院創設のきっかけともなった明暦の大火（1657）以降。当時、大橋と呼ばれた両国橋が架けられ、運河の開削、湿地の埋め立てが進むとともに、ここが江戸という都市の形成にとても重要な場所となりました。そして本所地域の寺院は参詣人をたくさん集めるようになったのです。

浮世絵の中で江戸の隅田川を遊ぶ

本サイトの取材期間、2015年に東京渋谷区から墨田区横川に移転した「たばこと塩の博物館」で、2016年1月5日から3月21日まで折よく「墨田川をめぐる文化と産業」展が開催され、江戸時代の隅田川流域で人々が四季の暮らしを楽しむ様子が描かれた浮世絵を見ることができました。

春はお花見。今も桜橋から見る墨堤の桜は人気がありますが、こ

2016年のお花見シーズンの隅田川を走る水上バス

「向ふ島花見の図」／歌川国明　文久2年（1862）3月（たばこと塩の博物館所蔵）

「東都両国遊船之図」／歌川広重　天保（1830-1844）頃（たばこと塩の博物館所蔵）

の桜は享保2年（1717）5月に、八代将軍吉宗の命により植樹されたものです。「江戸第一の花の名所」と『江戸名所花暦』（文政11年／1828刊）にも記された場所。そこでの花見の様子が描かれた「向ふ島花見の図」（歌川国明）。待乳山聖天（まつちやましょうてん）など対岸の風景とたくさんの船が行き交う隅田川を背景に、幼子を背負った女性を含む3人の女性が花びら舞う墨堤の桜を思い想いに楽しんでいます。

夏は花火に納涼船。両国では、享保18年（1733）以降、毎年5月28日（旧暦）が川開きと定められ、花火が打ち上げられ、この日から3ヶ月間、夕涼みの船遊びを楽しむことができました。歌川国丸の「両国納涼船」（文化／1804—1818頃）や歌川広重の「東都両国遊船之図」（天保／1830—1844頃）を見れば、両国橋の上でたくさんの江戸の人々と、花火を見上げ、隅田川に浮かぶ無数の納涼船を目で追うことができます。隅田川の花火大会はそもそも疫病などで亡くなった人を供養するために始まった行事。両国橋の東西は、茶屋や見世物小屋の並ぶ盛り場として栄えました。

隅田川が生んだ歌舞伎作者河竹黙阿弥

そして、秋には紅葉狩り、冬には雪見の風景を楽しむ人の姿が見られた隅田川。この川は江戸という大都市の物流を担う水路網に重要な役割を果たすとともに、その流域に集まる人々の間で交錯するさまざまな感情は、歌舞伎に見られるような人間ドラマの数々を生みました。

その歌舞伎の脚本を数多く手がけた作者で、江戸幕末から明治にかけて活躍した人に河竹黙阿弥（1816-1893）がいます。白浪作者として知られるこの歌舞伎作者は、明治20年から明治28年に亡くなるまで本所区南二葉町に暮らしました。

能の「隅田川」から始まる隅田川を背景とする舞台を「隅田川物」と云いますが、黙阿弥の出世作とされる安政元年（1854）3月に上演された「都鳥廓白浪（みやこどりながれのしらなみ）」は、「白浪物」のひとつであり、「隅田川物」の最後近くに登場した作品でもあります。

また、安政二年に市村座の座付き作家になってから書き下ろした作品に「鼠小紋東君新形（ねずみこもんはるのしんがた）」、別名「鼠小僧」があります。鼠小僧は寛政9年（1797）生まれの実在の盗賊。回向院にはその実在した鼠小僧の墓が江戸期よりありました。

江戸時代は、寺院法度により犯罪者は墓を作れなかったのですが、鼠小僧の場合、押し入るのは武家屋敷のみで、庶民からは義賊扱いされました。当時、牢獄で亡くなった犯罪者も供養していた無縁寺回向院であれば、そのさらし首を葬ることができるだろうと、あたかもそれを鼠小僧のように盗んで回向院に運び、墓（首塚）を築いた人がいました。また、大正15年には、鼠小僧をお参りして富くじを当てた篤信者によって

大横川親水公園から見える
東京スカイツリー

回向院境内にある鼠小僧供養墓。そばに欠いて持ち帰ると金運がよくなるといわれる「欠き石」があります。

二代目の墓が建立され現在見ることができます。

後世、その名前を広く知らしめたのが、黙阿弥の歌舞伎「鼠小僧」。そして芥川龍之介も鼠小僧のことは『鼠小僧次郎吉』をはじめ小説に何度か取り上げています。

養父の影響で幼い頃から歌舞伎にも親しんでいた芥川は、黙阿弥の歌舞伎を「此(この)大川のさびしい水の響きがあった」と随筆に書いています。人間の欲望うずまく江戸、大川べりで必死に生きる人々を情緒豊かに描いたその世界は、確かに隅田川の産物と呼んでしかるべきでしょう。

さて、江戸の隅田川流域の風景を浮世絵で見た「たばこと塩の博物館」を裏口から出ると、そこは今、大横川親水公園で、東京スカイツリーが間近に見えました。思わず「ああここが未来か」と口をついて出た言葉に、一瞬、江戸の人々が憑依(ひょうい)したかのように感じた今回の本所探訪。

水上バスのデッキに立ったときに鼻先をかすめた隅田川の匂いの中に、ほんの数パーセントでも、江戸の香りを期待してしまう、21世紀の本所界隈です。